

科研「多言語重層構造をなすインド文学史の先端的分析法と新記述」

第5回 研究会記録 (2011/05/21(土) 13:00~18:00 @東京外国語大学 本郷サテライト)

13:00 - 15:30 研究報告 (FINDAS 共催)

- 1) 石川まゆみ「フィジーにおけるヒンディー文学—現状報告—」
- 2) 坂田貞二「文学の媒体 (写本・印刷技術・メディア) —『ラーマの行いの湖』の例で辿る写本から石版印刷本・活字本への移行—」

15:40 - 18:00 全体討論

1) 事務連絡

(FINDAS 関連)

- ・東京外大における各言語の講義レジュメ→ハンドブックに。  
(去年開講の2言語：ベンガル・タミル + 今年開講の4言語)
- ・研究室レベルの雑誌をPDF化。執筆者からの了承を得るための協力要請。  
『インド文学』・『ヒンディー文学』・『ウルドゥー文学』 etc.

(その他)

- ・南アジア学会 (大阪)：部分的にバックアップ。  
「南アジアにおける英語文学」：科研メンバーの一部が個人として協力。
- ・論集：現段階で3本完成。適宜受付中。今年度に出すのであれば10月末までに。
- ・科研HP：閲覧方法の周知。(google/yahoo 検索→「東京外大 水野研究室」)
- ・書評：現段階で英文原稿3本完成。11月末までに完成させる。  
南アジア学会誌5号編集委員会 (6月開催) で締切を確定する予定。

2) 全体討論：書評担当者からの報告 + 意見

Introduction：目次構成はこれでいいのか。

各言語の文学史概要の寄せ集めで終わらせないためにはどうすべきか。

言語の配列などの構成を工夫する、共通項を設けるなど。 (臼田)

Sanskrit：「カーヴィヤ=サンスクリット文学」としていいのか。

インドの詩人の多言語性→日常生活で多言語を用いていたと考えていい。 (横地)

「カーヴィヤ」の語源に注目してもいいのでは。

普通の人を楽しんだ文学世界を想定すべき。

テキスト化した時点でその歴史性は止まる。 (水野)

Persian：インディアスタイルがいつ現れ、どのような形を取ったのかを中心に論を進めている。

文学作品だけでなく、文芸批評のテキストを利用しているところは特徴的。

政治的・社会的な動きが文学の流れに作用するものなのか、歴史的事象と合わせて論じている。

- 文学としてではなく、歴史的資料として扱っている（著者は歴史学者）。 (榊)
- Urdu：詩人伝を取り上げて、従来とは違う面から見ようと試みている。
- インドとパキスタンのウルドゥー文学の違いはどのようなものか。 (萩田)
- Kannada：著者は文化人類学者。本稿を完成させることはできず、著者と関係のあった人物が完成させた。
- 文学の歴史を文学の場に分けて見ていこうとする試みに則っている。
- 口承的なもの（民衆世界の文学作品）にも意図的に着目している。 (太田)
- Bengal：個々の作品は論じず、作家や読者層などの変化する状況を詳しく論じている。
- 結論に相当する部分がない。 (丹羽)
- Sindhi：なぜパンジャービーが入っていないのか。
- スィンディー語の状況を正確に把握することが必要。 (萬宮)
- Hindi：対象がどこにあるのか（専門的 or 一般）。現代を扱う研究者が少ない。 (石田)

18:30 – 懇親会 @棲鳳閣